

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 20 日現在

機関番号：35411

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370421

研究課題名(和文) 乾隆時代における、移動する杭州詩人集団の変質と展開に関する研究

研究課題名(英文) The study about the alteration and expansion of the moving Hangzhou poets group in Qianlong age.

研究代表者

市瀬 信子 (ICHINOSE, NOBUKO)

福山平成大学・経営学部・教授

研究者番号：50176294

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：まず、雍正年間初めに杭州詩人集団によって編纂された「南宋雜事詩」が、地方詩壇の唱和集として編纂されたことを指摘した。又、この作品により、杭州詩人が名声を得、他の地方都市の詩壇に招かれて、浙派と称される詩風で知られたこと、同時に地方の雑事詩、地方誌編纂にも関わったことを明らかにした。次に、乾隆年間初期に、再び杭州に戻った詩人達が詩会を開いた時の詩風を検証し、浙派の詩風とは異なる詩風であったことを明らかにした。こうした変化の理由として、彼らが各地に求められた時期には地方誌編纂が盛んになり、特に詩に関する記録の増加が目立つことから、地方文献の記録のために浙派の詩風が求められた可能性を指摘した。

研究成果の概要(英文)： First of all, we pointed out that Nansongzazhishi, at first time of the Yongzheng period by the poets group of Hangzhou edited, compiled as anthology of regional poetical circles. Next, we clarified that Hangzhou poets got fame by this work, invited by the poets group of other regional city, and became known by the poetic style as Zhe group, and at the same time they took part in edit of regional zazhishi poems, regional magazines. Third, we verified the poetic style, the poets came back to Hangzhou and opened poets party, was different from poetic style of the Zhe school. Finally we pointed out the reason of these change, they sought the poetic style of the Zhe school to record of regional document, at that time they were asked by various places and the edit of regional magazine became prosperous, especially the record of poem.

研究分野：中国文学

キーワード：杭州 詩会

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内においては、詩社や詩会に関する研究はあったが、明代のものにほぼ限られており、また明末の政治結社に関するものがほとんどである。その中で横田輝俊『中国近世文学評論史』(溪水社 1990)は、詩社の構成員と共に結社の文学的特徴を論じ、また大木康「黄牡丹詩会—明末清初江南文人点描—」(『東方学』第 99 輯、2000 年)は詩会に集う文人をとらえ、文学的分析を伴う研究であり、いずれも当該研究の詩風の分析にとって得るところが大きい。しかし、清代に及ぶこうした研究はなかった。一方日本における漢詩社の研究たる揖斐高『江戸の文人サロン』(吉川弘文館、2009)他は、本研究に近いテーマを日本で扱っている。こうした日本での研究成果を中国の詩壇研究にも応用することは意義がある。しかし同時に中国独自の背景というものを捉える必要があった。

(2) 国外においては、近年文人結社に関する研究が次々に発表され、何宗美『文人結社と明代文学的演進』(人民文学出版社、2011)、李玉栓『明代文人結社考』(中華書局、2012 年)など、詩社の構成員を中心に、詩社の実態が明らかにされてきている。しかし、文学的特徴についての言及が少なく、また清代に関しての研究はない。清代については、地域文学の研究が近年進んでおり、張仲謀『清代文化と浙派詩』(東方出版社、1997)は、浙派詩人の文学的特徴を論じたもので、地域文化の中にある詩会活動には触れていないが、詩風の特徴と人員について、本研究の参考となる。蔣寅『清代文学論稿』(鳳凰出版社、2009)「清代文学と地域文化」は、清代に地域文学が脚光を浴びたことを指摘し、杭州詩人と地方詩壇の関係を検討する上で、参考にすべき資料を提供してくれる。その他塩商に関する研究は、商人の側から詩会・詩壇を考察したもので、地方の塩商の下で活動した詩人の具体的資料を提供してくれる。しかし、いずれも、彼らが築いた詩風という、文学性には言及しておらず、史実としての考察はあっても、文学としての考察はされてこなかったといえる。

2. 研究の目的

本研究は、清朝乾隆初期に、地方都市の富商の詩社を移動しつつ詩会活動を行った杭州詩人達に焦点をあて、移動に伴い、彼らの活動の様態がどのように変化したのか、また詩会の流行に伴って広まった唱酬の詩風はどのように変質していったのかを調査し、そこから、詩会の文化が当時の詩壇に与えた影響と展開について解明しようとするものである。

乾隆期の詩会の唱和詩は、後世作品として評価されず、研究対象とされてこなかった。だが当時地方都市で隆盛を極めた詩社の杭州詩人達は時代の寵児であり、詩壇のリーダーだった。詩社の消滅は彼らの記録を消し、文学史では扱われることがなくなってしまう

った。彼らが残した痕跡を辿り、見逃されてきた清代詩史の一面を明らかにするのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) これまで乾隆期の杭州詩人集団の研究として、揚州と杭州における富商の詩社での活動を明らかにしてきたため、それと比較し、詩社への移動前後の詩人達の杭州における活動を調査し、詩社の盛衰に伴う、活動状況と詩風の変化を明らかにする。

(2) まず移動前に集団で作成された『南宋雜事詩』について、制作時期、制作詩人の詳細を調査する。詩が作られた経緯に注目し、『南宋雜事詩』以降、杭州詩人集団が移動を始めることになった原因を明らかにする。また参加詩人達が、作品以後どのような活動を行ったかを調査する。

(3) 『南宋雜事詩』の評価が、清代にどのように変遷していったかを調査する。それによって、社会でこの作品がどのように求められたのかを明らかにする。こうした調査から、杭州詩人集団が各地に求められた原因を明らかにする。

(4) 『南宋雜事詩』の詩人達の同人であり、その時期の詩壇の領袖でもあった周京に焦点をあて、その人生と作風を探る。揚州、天津といった蔵書家の元を転々とした他の杭州詩人は浙派の詩風で知られるが、周京は北方を中心に僻遠の地を移動する。その周京が、後に再び杭州詩壇の領袖となることから、異質な詩人周京を通じて杭州詩壇の性格を明らかにする。

(5) 典故を用い、難解な語句を駆使した地方都市に移動した杭州詩人達と、豪快な詩風を得意とした周京が、再び杭州に集まった乾隆時代の杭州詩壇の活動に注目し、各地への移動が終わった時期の杭州詩人の詩風の変遷を調査する。

(6) 地方文献から、杭州詩人集団の活動に関する文献を調査し、そこから彼らがどのように評価されたかを調査する。そこから杭州詩人たちの残した文学上の影響を明らかにする。また詩会の文化や詩風の変化の背景を探る。

4. 研究成果

(1) 『南宋雜事詩』の制作について

① 『南宋雜事詩』の成立時期

南宋雜事詩の成立については、陸謙祉『厲樊榭年譜』に「雍正元年(一七二三)時湖上觴詠極盛、有南宋雜事詩七卷」とある。又『南宋雜事詩』の作者の一人で、制作現場となった「小山堂」の主人である趙昱は、「雍正癸卯甲辰間(1723~1724)、共賦南宋雜事詩」と記す。一方、『増訂四庫簡明目錄標注』に「康熙中刊本、近年重刊本」とある。更に道光九年扶荔山房刊本『南宋雜事詩』の姚祖恩識語には、「成於乾隆丙戌、丁亥間、小山堂蒼萃開雕」とある。しかし、序を記した查慎行が雍正六年に世を去っていることから、乾隆年間刊行はあり得ず、虞万里が考証するよ

うに、引用された文献から、やはり雍正1~2年とすべきである。

②『南宋雜事詩』編纂の意図

『南宋雜事詩』は、凡例によれば、明の田汝成の『西湖遊覧志』『西湖遊覧志余』を補うものとして作成された。この両志は、宋代を中心とした西湖及び杭州の風景、軼聞などを記したもので『四庫全書総目提要』に、「地誌、雑史の間」とあるように、詩ではない。欠点は「真偽を考証する」典拠がないことであった。『南宋雜事詩』凡例では、詩集編纂の特徴として、詩は事実を記し事実には注をつける、典拠とした書名を記し総目を巻首につける、作者名を記す、等を挙げる。その上で「詩は僅か七百首」「隸事は幾んど数千条」とあるように、記された史実に重きをおいており、「郡邑志乗を修める者」がこれらの史実を見逃さないようにすることを願うという。詩である以上に地方誌としての役割を強く願うものであることが見える。

③『南宋雜事詩』の詩人

創作に参加したのは、当時は無位無官であった杭州の7名の詩人、沈嘉轍、吳焯、陳芝光、符曾、趙昱、厲鶚、趙信の中で、詩人として厲鶚が名を知られる他、ついで人気のあった符曾、蔵書家として名を知られる趙昱、趙信兄弟、吳焯の他は、全く無名とってよく、作品も『南宋雜事詩』以外に残されていない。彼らが『南宋雜事詩』の頃、どのように関わり合い、詩作活動を行っていたかを調査した。

厲鶚は『南宋雜事詩』の前年に『南宋雜事詩』と同じ手法で『南宋院画録』を制作しており、資料は、同人の趙昱らの蔵書楼資料を用いている。趙昱、趙信の屋敷にあった「小山堂」が『南宋雜事詩』制作の場となるのであるが、小山堂は詩人達の唱酬の場としてすでに定着しており、また考証、経史に関する討論などの学問を常時行っていたことが、全祖望「小山堂蔵書記」、董秉純「全謝山年譜」他からわかる。またこの屋敷に符曾、沈嘉轍が寄寓して、作詩、学問に取り組んでおり、後に符曾が各地の蔵書家の下に寄寓する原型がここにある。吳焯も蔵書家であり、この時期に趙昱らと文献を貸借して考訂作業を行い、自宅の瓶花齋で、趙昱同様に詩会を開催し、全国の詩人が唱酬と書籍の考訂のために訪れている（『兩浙輜軒録』）。符曾は趙昱宅に寄寓しながら、学問と唱酬に励み、『南宋雜事詩』後、各地の蔵書家たる塩商の下を転々としたことが知られる。沈嘉轍は、その父が趙昱の門下生であり、趙昱宅に寄寓し、符曾とともに唱和、考証に参加する。陳芝光は最も資料が少ないが、康熙終り頃の杭州唱酬の詩にその名がみえている。『南宋雜事詩』の詩人の共通点は、唱酬を共にした仲間であったことである。

④唱和集としての『南宋雜事詩』

地方誌の資料として珍重されている当該作品は、実は一種の唱和集である。それは、

唱酬の一環として作成されたこと、寄せられた題辭の幾つかが唱和集としてとらえていることから明らかである。唱和集とすれば、この後各地の商人蔵書家の下で編纂された唱和集、天津『沽上題襟集』、揚州『韓江雅集』に先だって、一地方で編纂された大規模唱和集の先駆けだったということになる。杭州詩人が後にこれら地方都市の詩会の唱酬に招かれたのは、こうした唱和集の実績の上に立つものである可能性が高い。ただ、杭州が知識豊富な詩人が7名揃ったという点では突出している。

⑤時代背景

『南宋雜事詩』が発表された後、浙江では文字獄が連続し、郷会試が停止され、暗い時代を迎える。雍正八年科挙が再開され、乾隆年間になり、趙昱・趙信兄弟が『南宋雜事詩』によって博学鴻詞に推挙され、同人も皆博学鴻試に推挙される榮譽をえて、改めて杭州詩人による「西湖觴詠の詩才」（全祖望「与趙谷林兄弟書」）が全国に名を馳せることとなる。大きな時代のうねりの中に作られたのがこの詩集である。

(2)『南宋雜事詩』の受容と展開

①四庫提要の評価

『南宋雜事詩』の約60年後の「四庫全書総目提要」の批評の概要は以下の通りである。

- ・事実を記すことが主眼で修辭は主ではなく、警句が多いが、寄せ集めもまた多く、文学的修辭については、洗練度が不足している。

- ・注に引用されている書籍が広範囲にわたり、多種に及び、詩句にはすべて根拠となる事実がある。更に典故については、歴史書のみならず、小説、筆記、雑著あるいは詩の中からも題材を集めている。

- ・南宋一時代の故実が巨細漏らさず網羅されており、南宋という時代の考証にとって、非常に価値あると評価できる。

以上の評価は、「四庫全書総目提要」の時期の、この作品の読まれ方がいかなるものであったかをよく伝えている。

②制作者の意図

詩人達の制作意図と方法は、凡例に記されている。それによれば、互いに取りあげる事蹟が重ならないよう留意し、注に典拠を記すにあたっては複数の文献を検討し、同一内容が複数文献に出る場合は、典拠を一つにしぼるなど、典拠の記録について特に留意したことが記されている。更に、孫引きは避け、確実に確認できる文献のみを取りあげ、他の金石誌等に取りあげられた碑伝は記さない、など、确实であり且つ未見であることを重視している。また詩に取りあげる題材は、著名な人物や風土に限らず、学校、科挙、凶史、金石の流傳から動植物、伎楽、器物服食他、ありとあらゆるものに及ぶ。こうして南宋一代の全てを、正確な資料の記録とともに残そうというのである。

しかし、資料を何の為に残すかといえ、南宋が亡びる悲しみで鈍い人の心までも動

かそうという「風人の旨」がそこにあるという。注だけでなく、詩を読んで心を動かすことを目的としているのである。「郡邑志乗」のためにこの詩を用いて欲しいと望みながらも、あくまでも詩があり、そこに注がある、というのが詩人達の意図であった。

③四庫提要以前の批評

『南宋雜事詩』には、序、題辭があり、その中には制作した時代の評価が見える。査慎行序は、詩の題材が豊富なこと、注に引用する書籍の多彩なことを述べた上で、読む者は詩に詠み込まれた事実が多いことを煩わしいと思うことなく、詩の言葉においてもその味わいを楽しむことができれば、作者達の「立言の旨」を失わないだろう、と述べ、文学性を賞賛する。万経序も、詩の言葉が「凄楚沈冥」でさっと読み飛ばすことはできないと、詩そのものが読者の胸を打つことを述べる。これらの序は、典故の豊富さと共に、詩の文学性に対する高い評価を示している。題辭では、張奕光が、歴史資料を補うものであることを評価すると共に「詩華妙なること絶倫」と詩句も華麗であると評価する。他にも杭世駿の「学の博と謂うべくして、辞も亦た鴻」と学問と詩句のいずれも評価するものである。一方趙殿成は、警句として、属对、巧綴、幽艶など、その特徴とともに詩句を選び出し、詩の文学性のみを評価する。この文が書かれたのは、乾隆元年で、雜事詩制作から十余年が経過しているが、当時は、詩として文学的評価を得ていたことがわかる。

しかし、また同時に全祖望のように、詩社の同人でありながら詩注のみを評価する例も確かにあり、法式善『梧門詩話』には、詩というより論である、と詩句への批判が高まったことが記されている。

④受容の展開

史料としての評価が確かなものになって以来、南宋を取りあげる地方誌、歴史書に『南宋雜事詩』を引用することは必須のこととなった。四庫提要では、この詩に取りあげられていない故実であるゆえに「希観」とする記述も見られる。様々な考証に用いられるようになった結果、その誤りを指摘されることもある。これは史料として正確さが求められていることの証しでもある。

更にこの詩集が高い評価を受けた結果、類似作、後継作を多く生み出すこととなった。『南宋雜事詩』が詠じ洩らした事蹟を詠むもの、異なる地方で同じような作品を作るもの等が陸続と続いた。杭州の後輩詩人たる袁枚は、この風潮を、類書、地方誌の手法であると痛烈に批判する。典故をむやみに詩に取り入れることへの批判は袁枚の中に繰り返し現れるが、これは当時の一般的な風潮への批判というよりも、同郷の杭州詩壇への愛着と反発という側面が大きいのではないだろうか。『南宋雜事詩』によって名を挙げた杭州詩壇が、同じ杭州詩壇の中に最も痛烈な批判者を持ったことは興味深いことである。袁枚

の「性靈説」の根底には、杭州への愛着と反発があることは、重視すべき点である。

(3) 周京と杭州詩壇

①詩壇の領袖としての周京

『南宋雜事詩』の時代が清代杭州の第一の隆盛期だとすれば、第二の隆盛期は乾隆年間初期に、各地方に散った杭州詩人たちが、一斉に杭州に戻り、詩会に集った時期である。第二の隆盛期は、乾隆八年から約10年間であるとされるが、これは杭世駿が北京から戻って南屏詩社を結び、粵州書院主講として広州に移るまでの期間である。よって杭世駿をこの時期の詩会の中心人物とする論考が多いのだが、実際には全祖望が「杭の詩人 社集を為し、群雅の萃まる所、穆門を奉じて職志と為す。」(「周穆門先生墓志銘」)とあるように、詩会の中心とされたのは周京という詩人であった。周京は、『南宋雜事詩』の詩人たちの詩友でもある。杭州の二度の隆盛期に関わった周京を軸にして、杭州詩壇を見なおすことで、清代杭州詩壇の位置づけを明らかにする。

②周京の文学史上の評価

周京は僅かの詩集を残すのみで、無位無官でもあったことから、記録が少なく、現在の研究でも、取りあげられることは少ない。しかし、当時の記録には、厲鶚ら杭州詩人が若かったころ、詩壇の領袖として若い詩人達に慕われことが記されている。周京の死に際し、全祖望が記した墓志銘には「穆門詩を以て天下に名あること五十余年。」「湖社の風流、百年以来、斯に於いて盛と為すも、皆穆門の鼓動する所なり。」(「周穆門先生墓志銘」)とある。杭州の詩壇隆盛を中心になって支えたのは、周京だということである。しかしながら、杭州詩壇の研究の中では、周京の評価は一定しない。当時の杭州詩人集団そのものを浙派と総称した上で、周京については、浙派の需要人物とする論考(嚴迪昌、王小恒他)と、張仲謀のように周京を無視する論考とがある。この矛盾を解決すべく考察を進めた。

③乾隆元年までの周京

周京の詩集『無悔齋集』は、康熙47年32歳から73歳で世を去るまでの作品を収録する。そこで乾隆元年に60歳で博学鴻試に推挙されるまでを、一つの区切りとする。

周京30代の作品には、すでに杭州の後輩達との唱酬の様子が描かれる。唱酬の相手であった金農は周京の10歳年下、厲鶚は15歳年下である。この当時の詩会の様子を厲鶚は、「無悔齋集序」に記している。つまり、他の若者が科挙の勉強に明け暮れ詩を作らなかった時に、厲鶚らは周京をリーダーとして詩会を頻繁に開催し、周京の詩は豪健で、一座の若者達が皆彼に傾倒していたというのである。こうした若い詩人達の詩会が当時話題を集めていたことは、袁枚の『子不語』に、周京と厲鶚の詩社に参加したいとあって、霊が降臨する、という逸話としても登場する。詩会での活躍の後、『南宋雜事詩』制作開始

以前に周京は杭州を離れ、蘇州から河北方面への旅を始める。旅の理由は貧困の解決のためである。全祖望の墓志銘によれば、各地の名士が彼の到来を待ち受けていたというが、これは杭州の詩友が地方に赴任しており、彼らによってその詩名が広く伝えられたためと考えられる。科挙を受けず、無官であったが、査慎行など当時の著名人にも詩を認められていた周京は、その知名度をもとに庇護者を求めて各地に移動したのである。移動の間にしばしば杭州に戻るが、杭州の地を離れていても、杭州での絶大な人気が続いていたことが、当時の記録に残されている。その一つが、周京が酒樓の壁に書き付けた詩が人気を集め、詩を写そうとする人が殺到して酒樓が儲かったこと、7、8年後も、他の題壁詩が消えてしまう中、周京の詩だけが皆に大事に守られて残っていたという逸話である。(桑調元「周徵士穆門墓志銘」、袁枚『隨園詩話』卷九)。

乾隆元年、博学鴻試に杭州から二十七名が推挙され(『民国杭州府志』卷一百一十一選挙五、国朝、制科)、厲鶚、周京の他、唱酬の仲間でもあった杭世駿、符曾、桑調元、趙昱、趙信、汪沆、陳撰、汪台らも推挙された。杭州詩壇の実力が認められた時である。しかし、周京を始め多くの詩人が結局試に応じず、そのことでまた高潔であるとの名声を得たのである。

④乾隆年間の杭州詩社隆盛期と周京

博学鴻試の後、周京は再び沢州の朱樟の元に移り、地方誌編纂や唱酬に加わる。乾隆6年、66歳で杭州に帰郷、以後故郷に留まる。同時期に、それまで各地の詩壇で活躍し、あるいは官職にあって外に出ていた杭州詩人達、顧之珽、沈垞、鄭江、金志章、吳廷華、周京、魯曾煜、厲鶚、杭世駿、施安らが一斉に帰郷して集合する。帰郷の理由は、罷免、退官など様々であったが、著名人が集合したことで、杭州詩壇は第二の隆盛期を迎えたのである。袁枚の「乾隆の初め、杭州詩酒の会最も盛ん。名士杭、厲の外、則ち朱鹿田樟、吳鷗亭城、汪抱樸台、金江声志章、張鷺洲湄、施竹田安、周穆門京有り、……明中、讓山両詩僧有りて古寺に留宿し、詩成れば伝抄せられ、紙価為に貴し。」の記載は正にこの時のことを指し、「紙価為に貴し」というように、出版されて人気を得たのである。まず詩社を開いたのは、周京と同世代の顧之珽である。杭世駿「遠村吟稿序」によると、乾隆7、8年に詩社を開く。メンバーは周京、朱樟、許大綸、鄭江、金志章、吳廷華、戴廷燿、厲鶚、汪台、梁啓心、杭世駿、丁敬、張湄、江源、陳兆崙、施安、汪沆、顧之麟といった錚々たる面々である。更に乾隆8年、杭世駿が罷免されて北京からもどり、南屏詩社を開く。メンバーは、朱樟、吳廷華、梁啓心、吳城、丁敬、汪台、金農、王曾祥、符曾、沈甲、張燧、妥開、舒瞻、施安、周京、施謙、傅王露、大恒(明中)、讓山、金志章、戴廷燿らで、

二つの詩社の成員は多くが重なるが、周京はいずれにも参加する。その後杭州の歴史に残る詩会が二度開催される。一つは汪台の復園で開催された詩会で、「復園紅板橋詩」としてまとめられ、参加者は周京を首唱に顧之珽、金志章、許承祖、鄭江、厲鶚、丁敬、梁啓心、金農、吳城、杭世駿、魯曾煜、積明中、積篆玉、崧亭、祝維誥、錢載、許大綸、汪仲鈞、汪台の20名が参加し、各人の詩の他、「二十人姓氏爵里考」なる伝記資料が付けられている。揚州詩社の詩会は有名であったが、それは杭州などの詩人を外から集めてのものであった。この詩会は杭州人を主とする浙江詩人だけで開催されている。また2年後には、杭州知府鄂敏が主催した「西湖修禊」が開かれる。こちらは61名六十一名、うち浙江出身でないのは、鄂敏を含めて7名のみ。他は全て浙江の詩人であり、35名が杭州詩人である。序は鄂敏が、後序は周京が書いている。これら大規模詩会で周京は首唱をつとめ、後序を書く等、最も重要な役割を担っており、詩会の中心になっていたことがわかる。

⑤周京の詩風と杭州詩壇

周京が詩会の中心になっていた理由として考えられるのは、詩の評価が高かったこと以外にも、長老であったこと、高潔な人格が慕われたことなどが挙げられる。最も重要な詩については、この時期の杭州詩壇を代表する浙派とは全く異なる詩風であった。浙派の詩人と称されるのは、厲鶚、杭世駿、金農らの面々である。その特徴は難解な語句、豊富な典故などである。一方周京は、豪快な詩風で知られ、簡明な語句を用い、晩年に杭州に戻ってからは穏健な詩風となったとされる。乾隆期の杭州詩壇を浙派そのものとする研究が多いのだが、だとすれば詩風が全く異なる周京が領袖となったのは不自然である。実は、乾隆期の杭州詩壇の詩風は、決していわゆる浙派らしさを供えたものではなかった。杭世駿は、明七子、十子、明末の西冷十子を引き合いに出し、集団で修辭や詠まれる感慨が皆似ているような作品を作ることを、強く批判している。それに対し、杭州の詩人は、豪健、敷腴、堅瘦、群紛と異なる詩風であり、また書籍の知識から作る者もあり、定格がなく、思うことを詠ずることのみを目指している、と述べている(「遠村吟稿序」)。これによれば、浙派の詩風はごく一部のものに過ぎない。浙派と異なる詩風の周京がリーダーであったことが、そのことを証明している。よって杭州詩壇全体を浙派とみなしている多くの研究は、視点を誤っていると考えられるべきである。

やがて周京をはじめ詩会の詩人達が世を去り、杭州を離れるにつれて、隆盛だった杭州詩会も衰退し、消滅する。周京は著名人であったにも関わらず、詩会でのみ活躍した詩人であり、著作を残さなかったため、忘れられてゆく。また詩会が衰退した後、浙派の詩風を真似た詩人たちが続いたため、周京を中

心とした自由な詩風を誇った杭州の特徴は、文学史の中で埋もれてしまったのである。

(4) 詩会と記録

① 地方詩会の特徴

揚州、天津を始めとする地方都市以外にも、周京が各地に求められ詩会に参加したように、当時は詩会が非常に盛んであったことはよく知られている。また揚州詩壇の詩会では、杭州詩人達は、典故に拘り、骨董を詠じ、史跡を詠じる浙派風の詩を多く作った。乾隆年間に杭州に詩人達が再び集った時の唱酬の詩は、浙派の詩風以外の詩が多かった。こうした詩会の隆盛、また詩風の内容についての背景については、これまで論じられていない。そこで文献編纂との関連について考察した。

② 詩社の記録

厲鶚の『宋詩紀事』の収録詩人数は 3812 名で、康熙朝『宋金元明朝詩』100 名、『宋詩鈔』84 名に比較し、急激に増加している。これは、月泉吟社のような詩社の記録を取りあげ、ほぼ無名の詩人の詩句を記録したためである。清代は詩の記録に拘った時代でもある。

③ 地方の記録と詩会

詩の記録で特徴的なのは、地方ごとの記録が膨大になったことである。明清代はあらゆるところで地方誌編纂が流行し、特に芸文志の編纂が重要視されたことがすでに指摘されている(蒋寅『清代文学論稿』)。しかし、明代には詩社の記録が乏しい。地方文学特に詩を蒐集するのに、詩会の詩が多く使われるようになったのは、清代である。杭州「南屏詩社」の記録は、開催場所となった『浄慈寺志』に多く収録されるが、それは詩会の詩を利用して、寺の史跡、庭園などを記録するものとなっている。

④ 記録のための詩会

揚州に目を転じると、骨董を詠じた詩は、『金石誌』に引用されている。このように、詩会の詩はそのまま記録に直結しており、地方詩会が盛んになった背景には、地方誌における芸文志の増加、あるいは金石誌、寺誌のごとき文献への記録という目的があったのではないかと推測できる。こうした詩会のありようが、詩壇の詩風に影響を与え、また詩会の増加を招いたと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

①市瀬信子、『南宋雜事詩』と杭州詩壇、『中国中世文学研究—森野繁夫博士追悼特集』(白帝社)、査読有、2014・10、第 63 号、pp. 332-355

②市瀬信子、南宋雜事詩の受容と展開、福山平成大学経営学部紀要『経営研究』、査読無、2015・3、第 11 号、pp. 11-26

③市瀬信子、袁枚「祭妹文ができるまで — 「女弟素文伝」と「哭三妹五十韻」一、『富

永一登先生退休記念論集—中国古典テキストとの対話—』(研文出版)、査読有、2015・10、pp. 302-329

④市瀬信子、周京と杭州詩壇、『中国中世文学研究』(白帝社)、査読有、2016・10、第 67 号、pp. 39-61

⑤市瀬信子、周京伝—「周穆門墓志銘」—を中心に—、福山平成大学経営学部紀要『経営研究』、査読無、2017・3、第 13 号、pp. 1-20 [学会発表] (計 3 件)

①市瀬信子、清代の詩注について、第 1 回「注釈と文学」研究会、2014・4・19

②市瀬信子、乾隆前期の杭州詩壇と詩人周京、中国中世文学会平成 27 年度研究大会、2015・11・7

③市瀬信子、清代詩社と記録、中国中世文学会平成 28 年度研究大会、2016・10・29

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市瀬信子 (ICHINOSE NOBUKO)

福山平成大学・経営学部経営学科・教授

研究者番号：50176294